



教皇様の聲

クリスマス★愛の祭

Libreria Editrice Vaticana,
Città del Vaticanoの転載許可済
発行所 ©1991
財団法人 精道教育促進協会
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6
☎(0797)31-3452

「するとたちまち天の軍勢の大群が天使に加わり、『いと高き所には神に栄光、地には善意の人々に平和』と神を賛美した。(ルカ2・13〜14)

みなさん、今日はクリスマス

1 を迎える準備となるノヴェナ(九日間)の最中です。つまり預言者によって語られ、イスラエルの人が待ち望んだ救い主・イエスの誕生を典礼で祝う準備の只中です。毎年、私たちの心には天使の喜びの歌が響きわたります。羊飼いたちに天使が現れ、偉大な出来事が起ったことを告げました。そして、布に包まれ、まぐさ桶に横たえられた救い主・主キリストを見にベトレヘムに行くように招いたのでした。(ルカ2・11参照)

私たちもベトレヘムに行きましょう。喜びと希望をもって、お生れになったばかりの幼子を御母マリアが寝かせておられるまぐさ桶に。「宿

に部屋がなかったからである。(ルカ2・7)

全世界でクリスマスを祝います。信じていない人でもこの祝いは何か普通ではない特別なものであると感じます。キリスト信者ならクリスマスが人間の歴史の中心的出来事、神のみことばが人間の贖いのために人となられたことの祝いであることは知っています。

ヘブライ人への手紙の著者は、この類ない驚くべき出来事から余り隔たりの無い時に次のように記しています。「神は、何度もいろいろな方法で、その昔預言者を通じて先祖に語られたが、この終りの日々には、子を万物の世継と定め、また、よってて万物を創られたその子を通じて語られた。神の栄光の輝き、神の本性の型である子は、その勢力あるみことばによって宇宙を保ち。」(ヘブライ1:1-3)

貧しく、小さな、隠れた、無防備の幼子は私たちのために人となられた神、闇に輝く人類の光、魂を生かす霊的生命、存在の根本的意味に光を注ぐ真理です。使徒聖ヨハネは次のように明言しています。「恩寵と真理はイエズス・キリストによって(…)神を見た人は一人もない。御父のふところのままに御独り子の神がこれを示された。(ヨハネ1・17、18)

2 イエズスがなぜ人間になられたのかを注意深く考えましょう。クリスマスを、確かなキリスト教信仰の伴わない、感傷的な、プレゼントに溢れただけのお祝いに終らせないためには、これをいつも心に留めなければなりません。

クリスマスには、罪に傷ついた人が、真理と赦しと慈しみと贖いを求めるという人類の歴史の一面を考える一方で、私たちが救い、神の愛と命にあずかれるようににもとに呼んでくださる神の善について考えます。クリスマスは神の愛のお祝いです。神は愛によって私たちが造り、愛によってキリストの内に私たちが贖い、神の国で私たちが待っていて

くださいます。今年没後九百年を記念する教会博士聖ベルナルドは、待降節第三の説教で次のように述べています。「キリストは私たちの中に来られただけでなく、私たちのために来られました。悲しいことに私たちは三つの病に苦しんでいます。つまり、道に迷いやすく、行動力に

くださいます。今年没後九百年を記念する教会博士聖ベルナルドは、待降節第三の説教で次のように述べています。「キリストは私たちの中に来られただけでなく、私たちのために来られました。悲しいことに私たちは三つの病に苦しんでいます。つまり、道に迷いやすく、行動力に

ください。私たちの中にお住みください。信仰の光で闇を照らしてください。私たちと共に留まりください。私たちの弱さを助けてください。私たちをお守りください。弱さを守り、私たちのために戦ってください。クリスマスはまた、全人類にキリストの光が届くようにと望む信者に



欠け、抵抗力に乏しいのです。善と悪を見極めるべき時、自らを欺き、善を成そうとしても強さが無く、悪に抵抗する勇氣も無く降参します。それゆえに、私たちには救い主の到来、悩む者の中にキリストが現存してくださる必要があります。来てく

力を与えてくれます。人々はこの宗教の中で善悪を区別しますが、キリスト信者はベトレヘムでお生れになった神である救い主イエスのみか唯一の道であり、真理であり、生命であらせられることを知っています。こうしてクリスマスは大きな責任

を負わせるお祝いです。ペトレヘム
のまぐさ桶に横たわる幼子イエズス
を礼拝すると、一人ひとりが良き知
らせ(福音)を宣言しなければなら
ないことに気づくでしょう。人間と
して、謙遜と貧しさの中でお生れに
なることによって、神は私たちが救
いの計画の強力な道具とするため、
いわばその全能の御力を制限された
のでした。

3

贖い主の誕生を典礼で祝えば、
キリスト信者としての生活が
さらに信じるに値するもの、納得さ
せるものであることがわかると確信
しつつ、熱心に、献身的に、クリス
マスの準備をしましょう。ナザレト
の家から遠く離れたところで貧しく
お生れになったイエズスは、ご自分
の傍に素朴で謙遜な人、マリアとヨ
ゼフと羊飼いと博士たちをお呼びに
なりましたが、これは謙遜であるこ
と、目立たないこと、神の御旨を平
和に喜んで受け入れること、隣人の
要求に応える愛の中にこそ真の価値
があることを教えるためでした。こ
のように、人間への神の愛の祝いで
あるクリスマスは、私たちの隣人へ
の愛の祝いでもあります。クリスマ
スのお祝いを述べると共に、皆さん
が愛の証人、愛の使者となられるこ
とを願います。皆さんの家庭に、教
区に、生活の場に、平和と暖かい心
を運んでください。

このノヴェナの間、聖母マリアが
共にいてくださいますように。もし
て聖なる仕方で信仰の喜びの内に、
愛のうちに、クリスマスを祝うこと
ができますように。

(90・12・19)

信仰が自然法に 光を当てる



(ヨハネ・パウロ二世は、法律の専
門家を励まされた。)

(…)今の時代、多くの人々を襲う
紛争や資源の不平等な分配などに
よって人権はおびただしく侵害され、
人間の尊厳は度重なって損なわれ
るという事態に全人類が見舞われて
います。このことは誰の目にも明らか
です。と同時に、人格の平等や正義
と平和への渴望に基づく大きな共同
社会を築いているという意識が芽生
え、和解と一致に向けて、限りがあ
りながらも着実に進んでおり、もは
やユートピアではないことがわか
ります。

かいつまんで言えば、しっかりとし
た基盤の上に調和のとれた一致を打
ち立てることです。すく心に浮かぶ
のは、誰もが認めている人権とい
う言葉です。しかし、進歩を確実にす
るには、自然法に光を当て、注視す
る必要があります。自然法とは、法
における真理といえます。

皆さんの方が、誰よりもよくご存
じのことと思いますが、自然法は、
立法者に永久に不変な個別の規定を
与えるものではありません。自然法
は、歴史的状况と無縁で、永遠の社
会的行動規範になるものではありません。
ただ、人権がどの地域においても
も確保されるべきことを求めます。
自然法は実定法をコントロールする
働きというよりは、むしろ実定法の
中で具体的に示され、実定法に生命

啓示は歴史の道を照らす

*「現実と歴史」と題する講演会で
のお話*

(…)この会合中、歴史への考察が
学者間の交流によって行われたとい
うことは、現代文化の状況において
非常に興味深いことです。
その中で、皆さんは歴史家の仕事
をさらに深く理解し、その責務を果
すにはどうすべきかを求めておられ

ます。歴史はたして意味を持つつ
か、多大な努力を払い、様々なこと
を征服し、数々の苦しみを耐えるだ
けの値打ちが歴史にはあるのか、と
問題を提起しておられるのです。こ
とは歴史に対する意義の問題、時代
を経た長い道程の意義の問題です。
それに対して、私たちはそれぞれ身
近に関係しています。

を与えるものです。だからこそ、目
に余る暴力が横行する所で効力を持
ち続けるのです。それは、極悪な圧
政者でさえ押さえることのできな
かった数多くの偉大で、勇敢な英雄
たちが示してきました。

最近起きた劇的な事件は、健全な
反応を生み、人権への認識は高ま
ってきました。これは各人の自覚も
高め、人権が万人に与えられた当
然の、そして不可侵のものであるべ
きである、すなわち、人類が共に共
すべきものである、との理解がさら
に深まってきました。これに関連し
て、今日の法律専門家の務めは、人
権の擁護促進に協力するばかりでな
く、人権の基盤を固めるためのし
かりした理論を提供することにあり
ます。今なお現れる種々の誘惑を暴
かっています。それは、人権を漠然
とした博愛主義とか、あいまいな政
治的選り好みでの保証とか、単なる

選択の問題にすぎぬとかいう危険な
誘惑のことです。

自然法を熟考することは、人格と
しての個々の特性を認めるとき目的
を達します。この点において、信仰
は大いなる光を与えます。というの
は、人は、創造主である神によって
神の子となるよう召され、神の子の
身分にまで高められるということ
を信仰は教えてくれるからです。救
い主が示された良い知らせは束縛の終
りを告げます。すなわち、愛を拒み
霊的交流を拒むことで人類を無力に
していた束縛が、打ち破られます。
神がその子キリストにおいてもたら
された崇高な愛のわざによって、私
たちは愛と霊的交流にふさわしい者
とされ、そのための力を与えられた
のです。人間の最終目的に注目して
ください。そうすれば、何が法や権
利を脅かそうとしているかがはっき
りとわかることでしょう。

(90・1・11)

25・8) 日が来ることを繰り返し教
えています。

救いの計画は、歴史の流れを照ら
します。事実、神のみことばは人と
なり給い、「全てをキリストのもとに
集め」(エフェゾ1・9-10)、「道、
真理、命」(ヨハネ14・6)となっ
てくたさいました。
そうです、神を信じる者にとって、
歴史は意味と価値と意義があります。
というのも、信者にとって歴史は、
救いの歴史です。主の再臨(パル
シア)を待つ間、信者には時が永遠
であることと希望を証しする使命が
あります。

(90・1・25)

説教・講話・書簡等の抄訳

聖性で、罪への

隷属状態と戦おう

「主の霊は：貧しい人々に良い便りをもたらす：ために私を遣わされた。(ルカ4・18) イザヤの預言書は続いてその便りの中身を説明します。それは、個人と民を圧迫していた諸々の隷属状態からの解放を宣言することです。社会的な面だけでなく、人格や尊厳を軽視する文化やイデオロギーの隷属状態からの解放を宣言せよというのです。(…)

しかし救い主が宣言なさるのには、人間が経験できる隷属状態の最も根源的な形である倫理的悪、罪の隷属状態からの解放です。

親愛なる兄弟の皆さん。現代人が置かれた状況は、道徳分野において広大で複雑な隷属状態であるといえます。

罪は良心を奴隷にする道であり、昔よりもっと強く、さらに陰險な道です。マスメディアの広範囲にわたる宣伝力によって、示唆と悪例の伝染は広がりまます。常軌を逸した行動が正当であると言うだけでなく、率直で成熟した良心を有する証拠だと、示されます。

心理学でいう条件づけの巧妙な網が張りめぐらされているのです。これは真の選択の自由を妨げる鎖に例えることもできます。人間に固有な自由にとつてつまずきの石となる現代の鎖を前にしても、解放と救いの泉である教会はキリストの福音を述

べ伝えなければなりません。(…)

キリストの使命は聖霊から出るものです。それは聖霊が主イエズスにおいてもたらされた内なる聖別から溢れ出ます。「主の霊は私の上にある。なぜなら主は私に油を注がれ、主は私に降られた。」初めに聖別、そして使命。使命のための聖別。イエズスは御父によって選ばれました。主は卓越して選ばれた御方です。聖霊は聖母マリアのいとも清い胎内で主に注油されました。すなわち聖霊は主を聖性で満ち溢れさせ、神の「聖なる所有物」としてとおかれたのです。聖霊は、主を神へと、そして救いの神の御計画へと向かわせられました。

「偉大な預言者」エレミアに語られた神の御言葉は、イエズスにおいて遂に完全に実現されました。「おまえを胎内につくるより先に、私はおまえを知っていた。母のふところから出るより先に、私はおまえを聖別し、国々の預言者と定めた。(エレミア1・5)

使徒たちに対しても、教会に対しても同じです。彼らは神化の賜であり、使命のための泉と励ましである聖霊の賜を受けます。パウロ六世は回勅「福音宣教」に書かれました。「事実、使徒たちが教会の福音宣教の大きな仕事を始めるために世のあらゆる方面に向かって出発したのは

聖霊が降臨されたペンテコステの後でした。ペトロはこの出来事を『私の霊をすべての人の上に注ぐ』と言ったヨエルの預言の成就として説明しています。(使徒行録2・17) ペトロは、神の子イエズスについて人々に話すことができるよう『聖霊に満たされました。』(同4・8参照) パウロも使徒職に身を捧げる前に『聖霊に満たされました。』(同9・17参照) 同じくステファノが奉仕の役務に選ばれた時、また後に、殉教した時もそうでした。(同6・5、10、7・55参照) ペトロとパウロ、ならびに十二使徒に語らせ、彼らが話す言葉を教えられた聖霊は『御言葉を聞く人々の上。』(同10・44) にも降られたのです。(『福音宣教』75)

使命のための聖別。私たち司祭にとって、これはすべて司祭職の秘跡的根源へ立ち戻れという助言です。叙階の秘跡によって私たちは、秘跡の印章で『注油され』、聖霊の賜で聖化されます。イエズスの注油と聖化にあずかる道が開かれたのです。聖化の賜は聖性を可能にすると同時に絶えず自己を聖化する義務を負わせます。叙階の秘跡によって与えられた存在論的な聖性から倫理的聖性への約束が生れます。

この聖性と聖化こそ福音宣教という使命の源でなければなりません。私たちはこのように司祭としての聖化と宣教活動と義務の間に存在する様々な深いつながりをもっと注意深く一致させなければなりません。

第一のつながりは、次のように表すことができます。すなわち聖化こそ神御自身がより効果的な宣教のた

(…) 今回の訪問は、聖女の生誕百年を記念するものです。(純潔の小さく可愛い殉教者とは、ピオ十二世が聖マリア・ゴレッティに冠した言葉です。一九五〇年六月二四日の列聖式の時のことでした。

聖女の生涯は、皆さんの多くが過ごす素朴な家庭生活、農場や作業場での日々の仕事の生活と全く同じものでした。ですから皆さんには、聖女をとても身近に感じるこ

とができるでしょう。

ところで、聖マリア・ゴレッティは、全教会の生ける証人です。

現代、さまざまな形をとって現れる実利的な物質主義と、野放図に幅をきかせる暴力が、絶えず私たちを脅し、苦しめています。悲しいかな、赤ん坊や罪のない幼児たちさえ容赦しないのです。このような時代において、(二〇世紀の聖アグネス) は希望を呼び起し、希望をもたらす使者となりました。

純潔と 連帯の模範 マリア・ゴレッティ

試験の中で聖女が示した強さは、脆い人間の本性から出たのではなく、確かに聖霊からの賜でした。その強さを示すことによって、マリア・ゴレッティは人間の身体が尊重すべきものであり、快楽の対象や単なる物質に落としめられてはならないということを教えてくれました。

刺され、深手を負いながら、彼女は相手を許しつつ死にました。

福音書の至福八端にある(心の清さ)は、(心の貧しさ)と一つになって、許しと平和をもたらします。

殉教者、和解の模範として、聖人の位に列せられた皆さんの若い同胞は、全てのキリスト信者と人類の運命を心にかける全ての人々に対し、彼女にならって信仰と神の御旨への忠実を保つよう招いています。

実に、信仰と忠実を礎としてののみ、友愛と連帯の世界を築くことが可能となるのです。(91・9・29)

という過程において聖霊の賜に依存するということ。神がお与えになられた驚くべき使命を前にする時、しばしば貧しく不適切で無力な自分を思い知らされます。若いエレミアの経験は私たちのものになります。「私は言った、ああ主よ、ごらんください。私は話し方を知りませんが、若い者ですから。(エレミア1・6) かし私たちを聖化する聖霊の賜は、預言者に語られた神の慰めの言葉を

不変の教え

聞かせてくれます。「だが主は私に答えられた。『自分を若者だと言うな。ただ、私がかつかわすところに行き、私の命じることとを告げよ。彼らの前で恐れるな。私はおまえを自由にするためにともにいる。』主のお告げ」(エレミア1・7)

私たちの楽観主義の基礎となるのはこの信頼です。神より強いものは何もないわけですから、それを損なうことのできるものは何もありません。もし私たちが信仰において主に一致しているなら、主は使徒パウロに言われたことを聞かせてくださるでしょう。「あなたには私の恩寵で足りる。恩寵の力は弱さのうちに完成されるからである」(コリント②

12・9)

ここまで来ると第三の関係は明らかに、より深くなります。聖化そのものが宣教となつていくことです。この聖性・聖化の過程そのものがキリストを宣言することになります。そうです。福音とは、単にイエズスが宣言された一連の真理ではなく、道、真理、生命であるイエズス御自身だからです。

主を求め、愛し、そして親しく、永続的でいよいよ深まる主との交わりに留まる人、つまりキリストを所有する人だけが証人となることができ、信じるに値する宣教師となり得ます。(90・9・18 五千人の司祭との御ミサで)

マリアはロザリオを唱える家庭に住む

ずっと以前からこの教区の皆さんは、聖母被昇天の司教座聖堂に見られるように聖母に委ねられており、そうすることに、救いの源である信仰とキリスト共同体を最も値打ちある宝として守って来られました。これは多くの教会や小聖堂で証明されています。しかし山の頂からマデイラの住民を見守り、その心を受け入れてこられたのは山の聖母です。人々はマリアを必要としています。マリアによって御子の聖心に近づき、そこで唯一の拠り所として平和を見出し、悲しむ人は慰めを得、生活の中で福音の価値に一致した生き方をするための忍耐と力を確実に見出します。

なさい。聖母マリアが傍におられることを感じ取りなさい。日々、信頼と愛情を新たにしなさい。そうすればマリアは、あなたが必要としているものを日毎に与え、助けてくださいます。特にロザリオを唱えることによって、マリアの思いが家庭内によりみがえりますように。ロザリオを唱えることは、あなたと私のマリアとの約束であり、決して逃したくないことです。あなたが教皇の心にほんの数分でも近づきたいのなら、ロザリオを唱えることをお薦めします。私も毎日唱え、皆さんを処女マリアの御前で思い出します。皆さんも同じように聖母に私のことをお話ししてくださいませ幸いです。(91・5・12)

司祭*犠牲の人



お告げの祈りを唱える時、私たちは「みことばは人ととなり給い、われらのうちに住み給えり」と信仰宣言をします。キリストは私たちに贖うためにこの世に来られ、私たちのために苦しみ、死去されました。託身(受肉)の秘義によってキリストは御自分を無となさったのです。「死ぬまで、十字架上に死ぬまで、自分を卑しくして従われた」(フィリッピ2・8)

私たちは十字架の前で使徒パウロと共に、「私は肉体をもって生きているが、私を愛し、私のためにご自身をわたされた神の子への信仰の中に生きています」(ガラツィア2・20)と唱えます。キリストの託身と受難と死は、測り知れない愛の秘義を顕現するよう導きます。実に私たちが受ける試練の意味が理解できるのはこの秘義のおかげです。試練を通して私たちは、キリストの十字架と主の贖いの御業に一致できるのです。使徒パウロは自分の人生における苦しみを次のように説明しています。私は、キリストとともに十字架につけられた。(同2・19) 彼は宣教のために随分苦しみました、苦しみの意味を深く悟っていました。



こうして司祭の生活の本質、すなわち司祭は犠牲の人であることが明らかになります。叙階の秘跡によって、司祭はキリストの犠

牲を捧げる使命を受け、神秘的な方法でキリストの御体と御血を現存させます。その結果、司祭としての存在そのものはキリストの贖いの犠牲に一致しているのです。司祭に叙階されたことによって、犠牲の生活を要求されています。

キリストは、王国を建設することが一つの名誉としか考えていなかった弟子たちに、「私の飲む杯を飲むことができるのか」(マルコ10・38)と尋ねになり、続いてどうしてこういう質問をしたかを説明されました。「人の子が来たのは仕えられるためではなくて仕えるためであり多くの人のあがないとして自分の命を与えるためである」(同10・45) 師キリスト自身が十字架の道に従われたのに、主の使命にあずかるために呼ばれた者が他の道を選ぶことができるのでしょうか。



司祭は、特に犠牲を捧げるように呼ばれていることを知っているに、にもかかわらず、度々困難に直面しますが、寛大な精神で耐えることができます。しかしそれには、困難をキリストの受難の光に照らして見なければなりません。聖パウロは次のように言ったではありませんか。「私は今あなたたちのために受けた苦しみを喜び、キリストの体である教会のために、私の体をもってキリストの苦しみの欠けた所を満たそうとする」(コロサイ1・24)

(…)司祭職を志している人は、物惜しみしない心を育まねばなりません。キリストを愛するがゆえ、また、それが使徒職の豊かな実を結ぶことを知りつつ、自己放棄を実行しなければならぬのです。

十字架の下に立たれた聖母マリアは、キリストの苦しみを分かちことなしにキリストと一致することはできないと教えています。司祭たちが試練に耐え、修養・訓練によって聖務から生ずる犠牲を勇気をもって受け入れる恵みを聖母マリアに祈り願ひましょう。(90・9・16)

「教皇様の声」年間購読者募集中!

日曜日ごとの「お告げの祈り」や水曜日ごとの一般謁見の時を始め、教皇様はあらゆる機会をとらえて教えを伝えておられます。本紙はヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま、わかり易い日本語に訳して伝える月刊紙です。

- 年間購読料(1~12月)のご案内
年間購読料は1部 900円です。20部以上まとめてお送りする場合、送料は無料となりますが、1部から19部まではどの場合も600円となります。たとえば3部お送りする場合、900円×3部+600円=3,300円
教会宛2部以上まとめてお送りする場合、送料は無料となります。
- 購読料は郵便振替にて、お申込み下さい。(神戸3-72393 精道教育促進協会)

財団法人 精道教育促進協会
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6
Tel.0797-31-3452 Fax.0797-31-3448

「教皇様の声」ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙 毎月 十日発行 定価 一部八十円 送料実費
■一年予約九〇〇円 送料六〇〇円 ■二十部以上の一括購入なら送料不要

郵便振替 神戸 3-72393